

第14回日本胸部外科学会総会

第14回 会長 榊 原 仟

第14回日本胸部外科学会総会は昭和36年10月11～13日、産経会館で開催、私が会長をつとめた。学会とは討論をする所だ、でなければ雑誌を読むのと変らない。同時に、学会は胸部外科の趨勢の大略を知る所だ、自分の研究領域以外をよく知っていなければ、特に研究指導者は若い研究者を指導出来ぬ。この考えに沿って学会を運営するため、会場の数を7カ所にもふやし、4分講演、6分討論と討論の時間を長くとして、実際に研究している人達の間での討論を期待した。他方、中央の大講堂では、内容的に興味のありそうな報告を選んで並べ、また心臓、肺、食道、縦隔とわけて、この道に力を尽されている教授方に、「その領域に於ける1年の進歩と将来の問題点」と題して特別講演を願った。また各室で行われた報告と討論の概略を各座長の先生方から報告していただいた。このほか Harken 教授の「心臓外科の歴史」という講演があった。

つまり、中央会場に坐って居れば、現在の胸部外科の傾向と、本学会講演内容の大略とを知ることが出来るようにと工夫したのである。

多数会場を用いる方法は、その後、他の学会にも波及して流行するようになったが、私共の如く、どこか1カ所で開いていればすべての大略が判るという工夫がなく、不評を買った例も出て来たので外科学会会長をした時には武道館をかりて一会場で学会を開催してみたのである。

演題の選択に会長の私見を入れないため、内容抄録のみをみせて専門の方々に票を入れて貰うという方法を始めて試みた。これも他の学会に波及するようになった。私の場合には、別に少数の余裕を残しておき、大学以外の機関からの報告を選択からはづされたものの中から選んで入れた。学会を大学だけの研究発表の場にしないようにとの配慮からであった。このほか教育講演や映画の上映を行ったが、これは若い会員を対象としたつもりであった。

最後の日、私は会長演説を行ったが、学問的な問題ではなく、試験管1個しか研究道具はなく、教室員は1名、患者数人程度の女子医専に行ってから、次第に発展させて心臓血圧研究所が出来上るまでの私の経験を話したのである。これは大学を出て教室で訓練を終え、社会に巣出とうとする時、どんな悪い条件の所へ行っても一生懸命にやれば、なんとかなるということを若い人達に知って貰いたかったからだ。総会の最終の場で行ったので聴衆は少なかったが、あの時の講演に感奮して、こういところでこうしているといって下さる方が今でも少くなく、私も大変うれしい。聴いて下さった方から多数の同感の手紙をいただいた事も忘れることが出来ない。

この時の会で始めて「夫人の会」をもった。外科医の研究者は時間的に余裕がなく、経済的にも恵まれず、夫人同伴で旅行するようなことは当時余り出来なかった。せめて学会の時にだけでも夫人を楽しませてあげてほしいというのが私の願いで、諸先生の御夫人の助けを借りて色々な会合をしていただいた。

この時点では一応成功したように思えた。夫人方はお互いに知り合ったし、主人達もお互いの夫人を知り得て、その後も永くおつき合いが続いた。しかし世の中が変わって、経済的に余裕が出来、むしろ夫人方の方が、方々を旅行して居られるような現在では、私が始め考えたような意味での夫人の会は必要でなくなったように思う。

この大会では優秀な研究報告に対して奨励賞を差上げるというようなことも行った。篤志の方があって寄附を受けたので、このようなことをしたが、研究というものは少し間をおいて判断するの
でなければ真価が判らぬ筈で、こんなことはしなければよかったと思っている。考えれば私も50歳
になったばかりの頃で、考えも熟して居らなかったと思う。 (東京女子医大心研名誉総長)
